

書 評

鎌倉矩子・他 編／鎌倉矩子 著

作業療法の世界—作業療法を知りたい・考えたい人のために

伊藤 利之（横浜市総合リハビリテーションセンター）

私がこの本の書評を申し出たのは、著者である鎌倉矩子氏のファンであるという理由だけではない。本書が「作業療法の生い立ち」に始まり、わが国における発展、現状、実践の枠組み、作業療法モデル論、そして「作業療法の進化」に至るまで、著者の歴史観とその洞察力によって解凍され、再び命を取り戻した生き物のように記されており、私自身も、作業療法の世界に引き込まれたからである。たしかに私は歴史が好きで、歴史観こそがその人の未来を創造するエネルギーの源と考えている人種である。それ故に鎌倉ファンなのかもしれない。

そもそも作業療法は、人間の基本的条件である「手の仕事」を利用した治療法であるが、この「仕事」は、生物としての人間が必然的に求められる「労働」を免除され、同時に社会的な「活動」を禁止されている病者にとって、人間としての尊厳を表現し得る唯一の残された action である。だからこそ、ここではそれが生産的であるか否かなど問題ではなく、それ自体がきわめて道徳的で基本的な価値を有するの

である。そこに作業療法が病者に対して生きる息吹を与える本質がある。

本書の「はじめに」で述べられているが、著者がこの本に記したかったのは、作業療法の精神、作業療法のイメージ、作業療法の感触であるという。そしてそれを読者に伝えるために自分に課した義務は、日本の近代作業療法の創始期に居合わせた世代のひとりとして、「歴史をきちんと書く」ことだった。私はこの最初の文章を読んだとき、もとよりその能力はないにしても、爪の垢を煎じて飲みたくなる心境に陥った。

本書は作業療法の精神やイメージを次世代に残し、若い人達に「作業療法の世界」を知ってもらだけでなく、できれば作業療法の世界に誘いたいという、作業療法を愛する著者の思いと人柄が、肌のぬくもりのように伝わってくる。しっかりとした歴史観に裏打ちされた作業療法の概論は、多くの読者を魅了することであろう。

(B5 頁206 3,300+税 2001 三輪書店刊)